

人間腐蝕

カネミライスオイルの追跡

深田俊祐



人間腐蝕

カネミライスオイルの追跡

深田俊祐

新報新書

著者紹介

深田俊祐 (ふかだ しゅんすけ)

1935年朝鮮咸鏡北道羅津生まれ。広島県で国民学校に入学、北九州市八幡区の新制中学校を卒業後、パン職人見習い、自動車修理工、画工、運転手などを転々。

1964年結核で入院療養。

1968年第1回社会新報文学賞受賞。現在、日鉄八幡港運勤務。北九州カネミライスオイル被害者を守る会会員。

著書 「永き闘いの序章」(社会新報刊)

現住所 北九州市八幡区祇園原町16の1

人間腐蝕・カネミライスオイルの追跡

1970年6月25日 第一刷 発行

著 者 深 田 俊 祐

発 行 社 会 新 報

東京都千代田区永田町1～8～1

TEL (580) 1171 (代) 振替 東京 68776

印刷 株式会社 交通図書協会

乱丁・落丁本はお取りかえいたします

定価 320円

I	亜硫酸ガスと浮遊粉塵の街で.....	3
II	風化するボタ山の見える筑豊で.....	73
III	日本の最西端五島・玉之浦町で.....	123
IV	カネミ倉庫を送検、高知県へ行く.....	201
V	原爆ドームと潜水艦のある市で.....	245
	あとがき.....	275

I

亜硫酸ガスと浮遊粉塵の街で



かたいものを踏むと

とびあがるほど痛い

関門トンネルを抜け、鹿児島本線を門司、小倉と下ると右手に白い煙をあげている煙突群が見える。住友^{住友}小倉製鉄所、九州電力新小倉発電所、八幡化学セメント工場、八幡製鉄所戸畑製造所の巨大な高炉も埋立地の先の方に見えるはずだ。亜硫酸ガスと粉塵が上空を浮遊し、遠くから望むとそれは赤く茶けたもやがすっぱり北九州の街をおおっているように見え、ひどく息苦しい。

工場から吐き出される煙はまだ続く。戸畑、枝光と列車が走ると右手に八幡製鉄所八幡製造所、左手に旭硝子牧山工場が見える。

枝光駅から列車が右へ大きくカーブして、八幡駅に着く頃右手に見える高炉が東田溶鉱炉群だ。この春、八幡・富士製鉄が合併して新日本製鉄になるのだが、鋳物銃の寡占化が公正取引委員会に合併話の段階でチェックされ、神戸製鋼に譲渡することとで折合いのついた、東田六号がここにある。

この東田溶鉱炉の地区整備掛で、原料機械点検方をしていた宇治野数行さん、カネミライスオイル中毒発病当時三十九才だった。

昭和四十三年三月中旬、最初の自覚症状は朝、臉や顔がはれる、という型で現われた。食欲がなくなり胃がつかえる、という症状が重なる。家の近くにある内科にかかった。

朝はれ、夕方になってはれがひくという症状は女に多いのだが、不思議ですなわ、という頼

各県別の患者数

厚生省が45年3月24日現在で調べた1014の油症患者の各県別は次の通り。

媛根島	7人
愛島	7人
鹿児島	3人
愛岡島	2人
東	2人
山取	1人
京	1人
428人	
400人	
59人	
39人	
21人	
17人	
15人	
12人	

りない診断で胃薬の投与を受けた。
溶鉱炉の原料機械点検方という仕事は、直接生産業務に
たずさわることはなく、いわば軽作業であった。しかし、
点検に見落としがあったりすると大事故の原因になったりす
るので、責任は重かった。腰に点検ハンマーと懐中電灯、
モンキースパナなどをぶら下げて点検方は常に歩き廻らな
ければならない。

だが、その歩くことが苦痛になってきた。

で骨だけで歩いているようにとび上るほど痛かった。歩くだけではない、立っているだけでも足は痛んだ。

地区整備の原料機械点検方は、大修繕の時など作業に立ち合う義務があった。熱風炉の改修などの大工事になると、長時間立っていなければならぬ。辛い日が続いた。

平和な家庭をおそ

ったカネミ油症禍

当時の苦しみを、宇治野数行さんは次のように書いている。

(前略) 短時間立っていてもヒザから下がカチカチに固くなり耐えられぬようになった。妻の手足がしびれ夜中に身動き出来ぬようになった

時は、そのまま半身不随になってしまふのではないかと、原因不明のためいい知れぬ不安を感じた。このころになると、入学したばかりの長男をはじめ、家族全員の顔にはニキビ状の吹出物が出ており、勤めから帰るとかならず誰かが横になりゴロゴロしていた。

「水神様のたたり」とか「家をあつかいすぎる」「梅毒うんぬん」とかげぐちをいわれるようになったのもこのころである。吹出物を押しだすとなんともしえぬ悪臭がし、また、はき気やめまいもともなった。小学三年の娘にまでニキビが出るということと、家族全部が同じ症状であることから「食中毒ではないか」と医師に相談したところ、逆にしかられる始末かといって、どこの病院にいつても原因はわからず、全くよくならぬままひどい小屋を思わせるような生活が続いた。

塗り薬、栄養剤、毒掃丸なども常用した。毒だみ草がよいときき、直方の祖母や義妹に頼んだり、自分で取りに行ったりして、お茶がわりに私は会社にもち込み飲用した。これもだめだった。八月から高熱作業の職場に配転になり三交代勤務になったが、当時室内温度最高六十三度というときは、三交代をはじめの私には大変な重労働であった。しかし一家の大黒柱として将来を考えると弱ねをはくことは出来なかった。「ここで負けてはならぬ」。

会社から帰ると食事をして直ぐ床につき、出勤するまで寝る。こうして毎日過ごした。出勤途中三メートルを歩くのに一メートルも右側にかたよってしまう。車や電柱を手で押して姿

勢を整えまた歩く。このような症状もすべてなれぬ作業のせいだと考えがなばった。足がこり固くなり、体は疲れきって口もきけず、タクシーで帰宅したことも再三だった。

このころになると長男は学校から帰るとかならず頭から毛布をかぶり横になっている。

「一番元気であるはずの高校生がなんというさまだ」と足蹴にすると以前は起きていたが、どんなに強く蹴っても起きなくなつた。よほど疲れがひどいのだろうと、その後はなすがままにした。「学校に行きたくない」という子供たちに「食中毒には違いないのだから、原因がわかればすぐ治るんだ。いま休んで落第したら一生恥ずかしい思いをするんだ。よく考えて辛抱して登校しろ」といいきかせて無理に通学させたものの、学校を途中でサボっているのではないか、きょうはグレて帰って来ないのではないか、と心配な毎日が続いた。吹出物から汗が出て、顔色は灰色に化物のようになった子供たちをどうしたらよいか悩み続けた。

「このままみんな死んでしまうのではないか」「外も歩けない」。そのほか世間のうわさなど妻から聞かされた。そんなとき「お前までがそんなことをいったら子供はますますだめになる」と、しかりつけた。「お父さんは顔は氣にならないの、やっぱり外に出たら恥ずかしいでしょう」ともいったが「すぐ治るんだし、病氣だから少しも恥ずかしくない」と子供たちには聞こえるように返事をした。

その実、ある残業のあつた朝、一人入浴してむこうの鏡にうつった顔は、目のまわりと唇

のまわりを除いて真黒になり、吸出物のある顔はまさに化物のようで、私自身終業してからみんなと人浴するのもつらく、鏡も見ずに帰宅して床についていたのだから、もちろん顔の醜さも知っており恥ずかしくもあった。しかし、ここで親が嘆いていては大変なことになるので、子供の前だけはカラ元氣を出していたのである。（後略）（北九州カネミライスオイル被害者の会発行『「油症」患者は訴える』）

悪化する症状と重労働

働きの苦痛に耐えて

ここに、働く日本人の典型的な例を見ることができる。子供たちを叱り上げまし、必死で働く父を見ることが出来る。このように死にもの狂いで働く人びとに支えられて、日本経済の高度成長はあるのだ。このことを見落としてはならない。

宇治野さんが、比較的軽作業であった地区整備の点検方から、高熱重筋という過酷な労働条件の職場へ配転になったのは、ほかならぬ本人の希望によるものだった。

長男は高校に入学し、中学生と小学生の娘たちの将来を考えると、常昼勤の点検方をしていたのでは家計がもたぬ、と考えてのことだった。それともうひとつ、三交代勤務の職場であるその新鋭工場に移れば、従業員の平均年齢が若いせいもあって、しっぴかりがんばれば工長になれるかもしれない、という昇進に望みをつないだのだ。

しかし、それは逆に悪い結果を生んだ。過酷な労働条件下での、三交代勤務は病状を悪化させることを早めるだけだった。

宇治野さんが、夏の盛りに配転になった工場は点検方をしていた東田溶鉱炉の西にある一製鋼の、連続鑄造という新鋭工場だった。

カネミライスオイル事件そのものの追跡とは、やや異なりわき道にそれるのだけれども、連続鑄造という工場についておおざっぱな説明をしておきたい。米ぬか油中毒で苦しんでいる身体に、いかにその高熱工場が過酷なものであるかを理解していただければ、と考えるからである。

ここ、二・三年前まで溶鉱炉で溶かされた鉱石は、溶銑になり製鋼工場の転炉へ運ばれ、そこでスクラップや石灰石、アルミなどと混ぜ酸素を吹き込み、造塊工場でインゴットケースと呼ばれる型枠に流し込まれて、インゴットと呼ばれる鋼塊になっていた。いったん冷えたインゴットを分塊工場の炉で加熱し圧延したものをスラブだとか、ビレットというふうに、薄板や丸鋼などの素材にしていたのが、従来の工程だった。

それが合理化ということで一工程省かれ、転炉の溶鋼鍋から連続鑄造に流し込むと、インゴットになる工程を跳び越えてビレットになって出て来るのだ。

ビルの地下三階くらいに深く掘った工場の、一番底が宇治野さんの新しい職場だった。転炉

で約千五百度くらいに熱せられた溶鋼を、クレーンで吊った溶鋼鍋が運び、注入方が鍋の底から栓を抜いて注ぎ、鑄込方が溶鋼を冷やしながらロールにかまして流してくる。

宇治野さんたち一組三人の機械運転方は、ロールで圧延されてくる一〇〇ミリから一三〇ミリ四角の、オレンジ色に灼けたビレットが斜めに降りてくるのを、ボールでこねて「く」の字に曲げ一定の規格に切断するための樋に案内してやらなければならない。

途中水で冷やすものの、実に六〇〇度から八〇〇度はあるという熱塊をボールでこねて、ビレットの流れる樋へ案内してやる作業は、まったく大変な重労働だった。八〇〇度もある鋼塊の傍にもの二、三分もいれば衣服から煙があがります。一組三人のうち、コントロール室で一人が機械運転をし、他の二人が六本のロール口から出てくるビレットを案内してやらなければならない。

コントロール室でクレーンをかけっぱなしにしても、六十度あるという工場なのだ。工場が地下にあって、熱気の逃げようがなかった。

体力をつけようと食ったライスオイルだが

そう思った。

仕事を済まして家へ帰っても、一時間も起きとられん、三交代勤務の高熱工場ちゃこんなもんか、こんなにきついもんか、宇治野さんはそう同僚に訊いた。そん

なもんですよ、同僚はそう答えた。

俺ばかりじゃない、誰だってきついんだ。慣れぬ三交代だからこんな俺はきつく感じるだけなんだ、歯をくいしばってがんばれば、暑い夏をがんばり通せばそのうち涼しくなるだろうし、なんでもなくなるにちがいない、そうきめてかかって宇治野さんは辛い勤務を続けた。

疲れやせる身体に、少しでも体力をつけようと思って油物を食った。子供たちにもすすめた。後になって考えれば、病状を悪化させるのに拍車をかけるだけの油物を食った。

昭和四十三年の夏休みに入って、会社を休むわけにはいかぬ父を除いて、宇治野さん母子四人は福岡市の九大病院へ行った。父の勤める八幡製鉄に附属する、八幡製鉄病院皮膚科の医師の紹介だった。

当時の記憶を前出『油症』患者は訴える』の中で宇治野トミ子さんは次のように書いている。

原因不明だ

九大へ行け

（前略）当時S病院（深田注、八幡製鉄病院）の皮膚科は九大から先生が週三日来ておられましたが、「原因などわからないから九大に行って下さい」と言われしました。

そのとき私たちは、「九大に行けば原因もすぐわかり、せめて夏休み中にはなんとかなるだろう」と話し合って、翌八月二日、小倉発七時五分の快速電車で博多に向かいました。ちょうどそのころ、列車内は海水浴客と通勤者でいっぱいでした。その中で化け物のようにな

った親子四人は恥ずかしさと体のきつさから言葉を交わす元気もなく、うつむいていました。ふと上を向くと立っている人が私たちの顔を見ながら、隣の人に指さして教えているのでした。私は頭から水をかけられたようで、その後、顔が火のように熱くなったことを今も忘れることは出来ません。このような思いをして一時間余り汽車にゆられ、九大で診察をうけたのが十一時ごろ。「同じ症状がこれで四家族めです」と言われ血液検査、尿の検査、顔やツメなどの写真を撮り、帰宅したのは六時過ぎで、玄関を上るのがやっとのおもいでした。それから一日おきにS病院へ、八月の暑い中を親子四人は人のいない道を選んで、電車に乗る時は一人一人が別々にすわり目立たぬようにし、降りる時は目で合図をして、心で「自動車に気をつけなさい」と念じながら病院に入ります。ここでもいっせいに人の視線が集中し、なにかそこそ言っているのが聞こえ、ある日「性病……」という言葉が耳にはいった時は、大声で泣き叫びたいくらいでした。子供たちも「お母さん、僕たちもう病院行きはいや」といいましたが、「そんなこといわずに頼むから行って」と子供たちに頼みました。

「お母さん、体がきつい」といっては横になり、「教科書の字が見えにくい」、補習授業の時に「黒板の字が見えない」といいだしました。

八月八日、また九大行き。この日は親子四人の皮膚を二枚ずつ取られ首にガーゼをはられ恥ずかしい思いで汽車に乗りました。海水浴帰りの人たちと一緒にになり、「お母さん、私達

も海水浴に行きたい。夏休みというのに病院通いばかりでなんの楽しみもないじゃない、もうこの顔でいいからせめてプールでも連れてって」とせがまれましたが、「そんな事を言わないで。この顔で行けば人が迷惑がるよ」といつてなだめるほかありませんでした。子供達はただ単純に水に浸ることで楽しいと思っているのでしょうか、親の気持として、沢山の目の集まるところで、またどのようにいやな言葉を耳にするか、その場になって子供心を傷つけられこれ以上悲しい思いをすることを考えると、どうしても連れて行けませんでした。子供達の顔は吹出物でいっぱい。

それに目ははれあがり直視出来ないくらいです。「お母さん今度九大に行ったらわかるね」「今度行ったらわかるよ、がまんしてね」

八月十五日九大へ。血液検査と顔のガーゼをとり抜糸しました。「先生わかりましたか」「まだわからぬ。患者の食べているものでライソオイルが共通しているが、まだはっきりしたことは言えない」と、G先生は言われました。この日もまた、皮膚をとった結果も、病気の原因も、そして治療法もわかりません。日ごろ気の強い長女は「お母さん、もう何回きても一緒よ。神様参りに行ってよ」と言いながら泣きじゃくり、私自身G先生にぶっつかってゆきたいようなたよりなさで腹立たしい気持でした。長男が「お母さん、もうなんにも言わないで帰ろう」と逆に私をなだめてくれました。もしそれがなかったら、私は本当に半泣き